

肥育牛における第四胃変位の手術による治療効果					
[要約] 乳用種肥育牛の第四胃左方変位に対して傍正中切開法による整復手術を実施すると、採食量、体重の減少が早期に回復し、 <u>枝肉格付成績</u> も正常牛と変わらなかった。					
担当部署	畜産研究所・中小家畜部・環境衛生研究室			連絡先	092-925-5177
対象作目	肉用牛	専門項目	衛生	成果分類	技術改良

[背景・ねらい]

第四胃変位は、近年の生産性向上や集約化に伴う家畜の生理的負担が引き金となって発生する生産病の一つで、第四胃の弛緩拡張による食欲不振と消化障害を主な症状とする消化器疾患である。一般的に、本疾患は内科療法による治療効果が低いため、泌乳牛では治療効果の高い外科手術が実施されている。しかし、県内では肥育牛の本疾患に対する外科手術の実施例は無いと言ってよい。そこで、当試験場で飼養する乳用種肥育牛に発生した重度の第四胃左方変位の2症例を用いて、泌乳牛と同様の外科手術を実施して治療効果を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 第四胃左方変位で重度の食欲不振になった症例1（13ヶ月齢・440kg）と症例2（14ヶ月齢・558kg）に対し、傍正中切開法で整復手術を実施すると、術後の採食量は順調に増加し、3～4週間ほどで正常牛と同程度まで回復した（図1）。
2. 症例1、2の術後の体重は一時的に減少したが、その後の体重は順調に増加し、出荷時の体重は正常牛と大きな差はなかった（図2）。
3. 症例1、2の枝肉格付成績は正常牛と比べて枝肉重量やロース芯面積はやや少ないが、ばらの厚さに大きな差はなかった。また症例1、2の肉質等級はいずれもB2であり正常牛と大きな差はなかった（表1）。
4. 肥育差益は症例1、2ともに正常牛と比べて少ないが、治療費を差し引いても赤字にはならず、2頭の肥育差益は合計で約10万円であった（表2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 畜産の診療現場において治療方法を選択する場合の参考資料として活用できる。
2. 第四胃の処置はレンベルト縫合による胃底部縫縮術を行い、幽門部大網のいわゆる「ペロ」を腹壁に固定する。

[具体的データ]

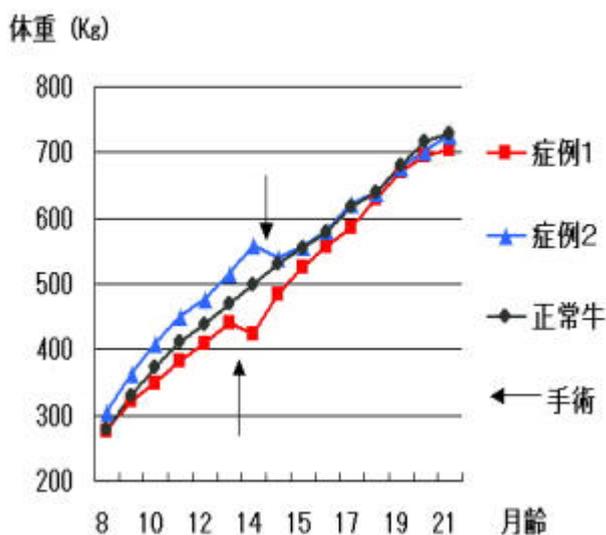
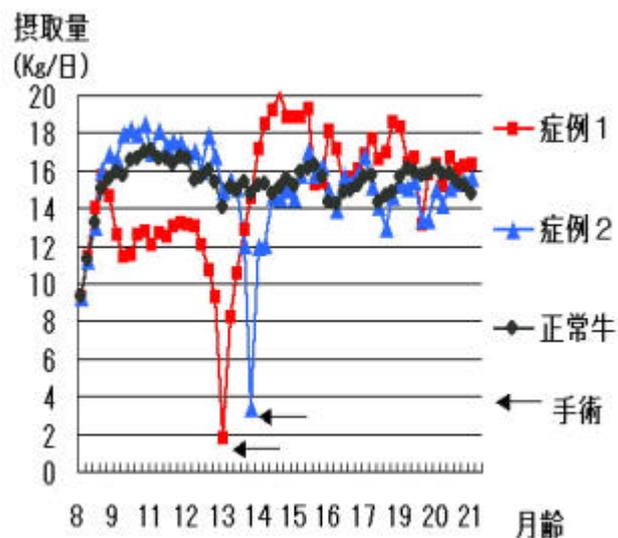


図1 肥育期間中の採食量の推移(平成13年度)

図2 肥育期間中の体重の推移(平成13年度)

注) 1. 正常牛のデータは15頭の平均値(以下同様)

表1 症例牛と正常牛の枝肉格付成績(平成13年度)

	歩留まり			等級		
	枝肉重量(kg)	コース芯面積(cm ²)	ばら厚さ(cm)	B 3	B 2	C 2
症例 1	402	35	5.3	-	1	-
症例 2	402	38	5.3	-	1	-
正常牛 (n = 15)	419	43	5.5	6	5	4

表2 症例牛と正常牛の1頭あたりの経済性(平成13年度)

	販売価格	素畜費	飼料費	治療費	肥育差益
症例 1	303,942	78,750	142,091	65,805	17,296
症例 2	374,437	78,750	144,637	65,805	85,245
正常牛 (n = 15)	394,253	78,750	146,440	0	169,063

注) 1. 素畜費は17頭の合計金額を頭数割りして算出

2. 治療費は家畜共済診療点数表で算出した往診料、手術料、薬価代その他診療技術料の合計額

3. 肥育差益は販売価格から素畜費、飼料費、治療費を差し引いて算出

[その他]

研究課題名: 焼酎糟を活用した良質肉安定生産のための混合飼料給与技術

予算区分: 経常

研究期間: 平成13年度(平成10~12年)

研究担当者: 北崎宏平、平嶋善典、原田美奈子、笠正二郎、古賀鉄也、磯崎良寛

発表論文等: 平成13年度日本産業動物獣医学会(九州)講演要旨 p62